南々空知地域ロングスティ型移住ビジョン策定委員会

まおいオープン大学

議事録～概要版～

開催：平成１８年１１月３日（金）

Ⅰ．概要

１．日　時　　平成 18 年 11 月 3 日（金）　9 時 30 分～19 時

２．会　場　　（午前の部）長沼町総合保健福祉センター「りふれ」
　　住所：夕張郡由仁町伏見 134-2　　電話：0123-82-2001
　　（夕食会 ＆ まちづくりトーク）マオイゴルフリゾートホテル
　　住所：長沼町東 5 線北 10 号　　電話：0123-88-3010

３．次　第　　１）午前の部
　　09:30 主催者挨拶…板谷 利雄（長沼町長）
　　まおいオープン大学の開校に当たって
　　…小林 英嗣 氏（北海道大学大学院工学研究科 教授、NPO 法人日本都市計画家協会 副会長）
　　…辻井 達一 氏（(財)日本グラウンドワーク協会 理事長、(財)北海道環境財団 理事長）
　　10:00 講演１「地方にこそある起業の芽～つまもの需要を産業化」
　　…横石 知二 氏（(株)いろどり 代表取締役）
　　11:30 講演２「広域連携によるエリアマネジメントの実践～スローな阿蘇づくり・阿蘇カルデラツーリズム」
　　…坂元 英俊 氏（(財)阿蘇地域振興デザインセンター 事務局長）

　　２）午後の部
　　13:00 昼食（りふれ 2F 研修室）
　　14:00 まおい田園文化施設見学ツアー（バスツアー）
　　17:00 夕食会 ＆ まちづくりトーク（マオイゴルフリゾートホテル）

Ⅱ．午前の部議事録概要

●まおいオープン大学の開校に当たって

…小林 英嗣 氏（北海道大学大学院工学研究科 教授、NPO 法人日本都市計画家協会 副会長）

・北海道で残念なことは、自分たちの地域のよさを出身地や東京に献上するように考えがちなことだ。そうではなく、地域にある価値のある環境、食べ物、風景を分けてあげるという意識でチャレンジする。そういう人が多く出てきている。

・サスティナブル、エコロジーという世界的な動きがあるが、この地域にはそういった動きに追いつき追い越していける環境、資源、人材がある。そのための知恵をこういう場で束ねながら次世代へ渡していきたい。

・日本を動かす人材を輩出した松下村塾のような動きがこの地域から出てくるといい。そのシンボルがマオイ丘陵になるのではないか。

●まおいオープン大学の開校に当たって

…辻井 達一 氏（(財)日本グラウンドワーク協会 理事長、(財)北海道環境財団 理事長）

・このイベントは「オープン大学」という名称だが、大学は本来オープンなもの。昔、川喜田二郎氏による移動大学を手伝ったのだが、そのときにつき合った連中とは、いまだに何人か親しくしている。そういうものがこういう場を通じて生まれてくるといい。

・もみじの名所である大阪箕面の名物の一つがもみじの天ぷら。おいしいものではないが、一種の秋の風物詩として客も喜び、いわばだまされている。そんな面白い仕掛けがあってもいい。まさに自由な発想をするのが大事ではないか。

●講演１「地方にこそある起業の芽～つまもの需要を産業化」
…横石 知二 氏（(株)いろどり 代表取締役）

・自分に出番があると思い、自分が磨かれて商品ができる。一人一人が原点。地域全体でやろうというより、そこにいる一人一人がその気持ちを持てるかどうかが大切だ。

・現在、上勝町では住民が処理施設にごみを持参、３４分別し、２０２０年までにごみゼロを目指す取り組みを行っている。これができるのは、住民にやらされているという感覚がなく、きれいなまちをつくれば自分の商品が売れるというふうに自分のことだと思ってやっているから。

・北海道も同じだが、絶対にやらなければいけないのは、商売の仕組みをつくること。上勝町は他地域でできない仕組みを次々と組み立ててきた。

・昔、町内で講演会や視察をしても何も変わらなかった。仕組み作りは商売のためにやったことだが、それによって起業家としての習慣付けができ、人間を変えることができた。

・昔はリーダーが地域全体を引っ張っていたが、組織が大きくなり、その形が崩れてきた。あるいは、リーダーだけが楽しんで会合をしている。本当に大事なのは、会社なら社員、まちなら地域住民一人一人のレベルが上がっていくこと。

・都市と農村の差は、頭を使う生活習慣があるかどうか。インターネットの時代、都市と農村の格差は縮まると言われていたが、どんどん開いてきた。それは生かす力が違うから。生かす力がつくよう生活習慣を仕組みの中につくり、動かすことが大事だ。

・気を育てることが大切。コンピューターもそのための道具。また、手書きのメッセージＦＡＸを使っていろどり事業に取り組む人に気を送り、やる気を起こすようにしている。

・地方がだめになってきたのは、組織が合併して中心的な存在が消えたから。自分が育った学校がなくなると、その地域は壊滅的に気を落としてしまう。一次産業がもうからなくなってきたこと、公共事業の激減により地方の気が引いており、今はそれが加速している。そこへ福祉産業が入ってきて人間の気がそちらに取られていく。これが、地方がだめになる構図だ。

・２４年間商売をしてきたが、上をとめておいて、下にコストをかけても絶対にもうからない。上をしっかり攻めることによって逆に下のコストが下がる。例えば病院へ行くと１万５，０００円かかるが、仕事をして１万円稼ぐと２万５，０００円の差。社会保障費や経費を落とすのではなく、ビジネスが成功することで逆にコストが下がる、そういう発想が必要だ。

・昔と違って素材や観光資源そのものの価値はたいへん小さい。それに場面、価値、情報、仕組みをどううまくからめるかが大事。昔は素材が７で生かす力が３だったが、今は素

材が３で生かす力が７割だ。

・商売で大切なのは葵のご紋づくり。ここでなければできないこと、相手に良さを説明できるものを切り札として持つことが大切。

・何もせずに自分の会社、まちの悪口を言っていたら下りのエスカレーターに乗ることになる。今は攻め続けなければ守れない。強いものがあって、欠点を消していき、そして、自慢し、自信ができて、行動に移すというパターンだ。

・情報発信はすごく大事だが、私は７対３の比率で外に発信する。内の評価を外に言っても通用しないが、外の評価を内に入れ込んでくると地元の人は非常に感じてくる。

・今、若い人で田舎に行きたい人がたくさんいるが、それを入れてこない手はない。団塊の世代は地方にはそんなに帰ってこない。それより意欲のある２０代の若者を捕まえた方が地域に活力が生まれる。

・８０代後半のおばあさんが、生きているうちにとれないだろうにもみじの種をまいていた。聞くと「私が死んだら子や孫が継いでくれる。これは種でなく、夢をまいているんだ」。年をとっても地域のことを誇りに思い夢を語れる。それができる産業、形を育てることが、その地域の活力になると実感している。

●講演２「広域連携によるエリアマネジメントの実践～スローな阿蘇づくり・阿蘇カルデラツーリズム」…坂元 英俊 氏（(財)阿蘇地域振興デザインセンター 事務局長）

・これまで観光は一部の観光業者のための観光で、地域づくりにつながることはほとんどなかった。そうではなく、観光の魅力を地域自身の魅力として息づかせ、地域の価値・魅力を上げて外部に発信することで地域に誇りを持てるようにする。それを広域連携で進めているのが私たち、阿蘇地域振興デザインセンターだ。

・課題の一つ目は、各町村をどのようにしてつなぐか。二つ目は、地域との交流を求める「ツーリズム」ニーズへの対応。三つ目は、幹線道路における渋滞の回避。

・上記の課題を解決し阿蘇の旅スタイルを実現するために、

○タウンツーリズム、グリーンツーリズム、エコツーリズム。

○地域でもてなしのできる人、案内人をつくること。

○パークアンドライド、サイクルトレイン、循環バス。

…に取り組んでいる。

・どうやったら通に人が来るようになるかではなくて、どうやったら通で時間を過ごせる

ようになるかを糸口として取り組みを進めていった。

・そして、

○何がその店の売りなのかが分かる看板。

○店の場所がわかるマップ。

○各店の名物づくり。

○空地への植樹。

…をしていくことで、人が集まる通ができてきた。

・通で３０分過ごせるようになると裏道を回るようになる。そうすると１時間過ごせるようになる。１時間過ごせるようになると、食事などいろいろな需要が生まれる。

・商店街活性化は、全体ではなく、お客さんが一番集まる可能性を持っているところを見つけ出し伸ばしていくことをしないと始まらない。

・そこに住む自分たちがもっと楽しく住めるようにしていくということが一つのキーワード。そこにお客さんが来て「良いですね」という話をすることで住む人たちが変わっていき、さらに活性化していく。そういった良い循環をまわし、そういう商店街を結ぶことが阿蘇における地域連携になってくる。

・行政ではツーリズム、商店街、自然、交通は別々の担当部署。それを地域でどう結びつけてシステム化するのかが一番大変である。それをする組織が必要なのだが、阿蘇地域振興デザインセンターはそれを行っている。

・事業のために何かをするのではなく、地域づくりの仕組みをつくり、そこに必要な事業を落とす形である。

・（集客できる）地域は早くはできない。バスを回せば人が来てくれるのではなく、地域で受け入れできるようになって、そこで何ができるかがきちんとわかるようになって初めてバスを使ってもらえるようになる。

・仕組みも大事だが、地元の人たちが自分たちの地域で魅力を見つけ出すことも大事。

・例えばマオイ地域が連携するときの一つの象徴はマオイの丘陵ではないか。そこから見る山々、夕日、といったことからマオイのよさを見つけ出し、それをどうやって連携させていくかという形になる。マオイという場所がキーワードになって、地域の大きな売りをつくっていけるのではないか。

・そのときに、北海道のマオイではなく、全国の人たちが来たくなる場所やシーン、過ごし方をどうつくり出していくのかが、連携、滞在型ロングスティの大きなポイントではないか。

Ⅲ．午後の部

●まおい田園文化施設見学ツアー

①南幌町：農産物加工センター →　②南幌町：大規模住宅地見学 →
③栗山町：小林酒造 →　④栗山町：駅前まちづくり →
⑤由仁町：優良田園住宅 →　⑥長沼町：どぶろく製造

●夕食会＆まちづくりトーク

①主催者挨拶（南幌町長・三好　富士夫氏）
②地元産物による夕食会
③まおいスロートーク「まおい地域の魅力と可能性、そして…」
　地元住民、行政関係者、専門家等によるトーク

●午後の部 実施写真集

まおい田園文化施設見学ツアー（小林酒造）

まおい田園文化施設見学ツアー（バス車中）

まおい田園文化施設見学ツアー（マオイ丘陵ライフ〔住宅〕）

夕食会＆まちづくりトーク

夕食会＆まちづくりトーク

夕食会＆まちづくりトーク